

写真による LL ブック制作とその公開：

機関リポジトリの広報的意義

川 崎 千 加

Production and publication of easy-read-book with the photograph : Public-relations meaning of an Institutional repositories.

Chika Kawasaki

抄 録

2012年7月末、大阪女学院図書館の機関リポジトリで写真によるLLブック試行版『はつ恋』を電子書籍として公開した。今回の写真版でのLLブックという発想を広く知ってもらう方法として、大学のリポジトリでの公開を選択した。しかし、機関リポジトリ自体は主に大学研究者の成果や大学全体の教育資源を公開するもので、誰もがアクセスするものではない。そのため、メーリングリストなどでの広報を行った。その結果、アクセス数が上位に位置づけられた。本稿はこのLLブック公開を通して、機関リポジトリが持つ大学の広報的機能について考察した。

キーワード：LLブック、機関リポジトリ、大学広報、電子書籍

(2012年10月1日受理)

Abstract

The e-book, which is titled "First Love", was released in Osaka Jogakuin Research Repository as an easy-read-book with photographs on July 23, 2012. To let people know widely about the idea of easy-read-book with photographs, we chose to publish in Osaka Jogakuin Research repository. In order to get many people to access, we made public relations using mailing list and etc. As a result, the number of access is positioned at the top. In this paper, we consider the function of university relations that Institutional Repositories have through release of an easy-read-book.

Key words: easy-read-book, LättLäst, Institutional Repository, University Relations

(Received October 1, 2012)

1. はじめに

タイトルにある LL ブックの LL とは、スウェーデン語の LättLäst（やさしく読める、わかりやすい）といった意味を持つ。

LL ブックは知的障害や読書障害（ディスレクシア）の人にもわかりやすく読める本として制作されたものである。スウェーデンでは国の援助で多くの LL ブックが制作されている（注1）が、日本では翻訳書が若干あるもののオリジナルで作成されているものは非常に少ないのが現状である。

筆者は日本の LL ブック研究で知られる藤澤和子氏（注2）との出会いから、大阪芸術大学図書館の多賀谷津也子氏と同大学の院生や学生達の協力（注3）を得て写真による日本発の LL ブック制作に関わった。藤澤氏が受けた 2011 年度日本コミュニケーション障害学会研究助成により、約 2 年を経てコミカルな 7 つのエピソードからなる写真版 LL ブック『はつ恋』の試行版が完成した。

当初は紙メディアでの出版を考えたが、まず多くの人に見てもらいたいことから、本学図書館の機関リポジトリ（Institutional Repository, 以下 IR）での公開を選択した。公開に際し、本学小松泰信准教授にご協力いただき、iPad での閲覧が可能な電子書籍版とし、2012 年 7 月 21 日から本学 IR で公開された。一方で、メーリングリストや雑誌記事への掲載、講演時での紹介など多面的な広報を試みた。その結果、IR でのアクセスが増加し、8 月には全国の大規模大学を抜いて本学の IR が高いランクに位置づけられた。本稿では、この LL ブック公開から IR が持つ大学広報としての機能について考察する。



図 1 LL ブック『はつ恋』表紙

2. 機関リポジトリの現状

2.1 IR（機関リポジトリ）とは、

IR とは「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」であり、国立情報学研究所（以下 NII）が実施する次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業の 1 つ（国立情報学，2011，p. 1）である。NII が収集するのは各機関が国際標準形式で記述したメタデータであり、本文や画像などの IR での公開は著作権処理なども踏まえ各機関が決定するものとなっている。日本では、平成 15 年に千葉大学で最初の IR が構築され、平成 16 年度に NII による「機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト」がスタートした。平成 17 年度に 19 機関に対する機関リポジトリ構築のための委託事業が開始され、平成 18 年度からは全国展開を図ってきている。2012 年 9 月 22 日現在の NII が委託し IR を構築している機関数は 186 件

となっている（国立情報学，2012a）。

なお、NIIの事業への参加以外にも、独自もしくは連合して開発されたシステムを用いたIRもあり、構築数は国公立大学等の約250機関に設けられている。国際的には2012年4月現在のIR関連情報サイトOpenDOARに登録されている機関数は2,199機関であり、日本は136機関で世界第4位となっている（科学技術，2012，p.14）。

2.1.1 学術情報のオープンアクセス

IRへの取り組みの背景には、研究成果の公表が学会や出版社による学術雑誌を介して行われるようになったことがある。その結果、「増大した研究成果の流通に商業出版社が主導的な役割を果たすように」なり、学術雑誌の高騰から研究者や多くの大学図書館にとって学術情報の入手が困難な状況が発生した。その対応として、1990年代からインターネットで学術情報を無料で公開し、誰でも制約なくアクセスできる「オープンアクセス」への発想が国際的にも広まったとされる（科学技術，2009）。

オープンアクセスは、研究成果を広く社会に向けて公開することで大学に対する社会的認知を高め、大学の社会への説明責任の一端を果たすものとして位置づけられてきている。また、IRの構築・運用は、学術論文に留まらず、「学位論文、研究報告書、授業の資料など、これまであまり流通していなかった様々な学術情報が電子化され、広く流通することにも繋がるもの」（科学技術，2009）として捉えられている。諸外国のオープンアクセスへの動きに対し、研究成果の情報発信と流通体制の受け皿としてIRの活用を促進していく方向性が示されている（文部科学省，2011，p.39；科学技術，2012，p.11）。

また、このようなオープンアクセスを推進しIRの効果的な整備・活用に対応し、各リポジトリを連携させ、横断的に検索できるシステムが構築されている。日本では2008年度からNIIが日本のIRを横断検索できるシステムとして、JAIRO（Japanese Institutional Repositories Online）によるサービスを開始している（科学技術，2012，p.14）。

2.2 IRのコンテンツの特徴

では、現在のIRにはどのようなコンテンツが登録されているのかを見てみたい。JAIROの分析システムであるNIIのIRDBコンテンツ分析（NII Institutional Repositories DataBase Contents Analysis）によれば、2012年8月31日現在のIR数は217、コンテンツ数は全体で1,406,613件で、その内本文が公開されているものは1,038,155件となっている（国立情報学，2012b）。

また、表1はJAIROに登録されているデータ全体の資源タイプ別のコンテンツ数である。最も多いのは紀要論文の42.2%、次いで学術雑誌論文が21.9%となっておりこの2つの資源タイプで60%以上を占めている。科学技術（2012，pp.15-16）によれば、紀要論文は多くの場合出版流通には乗らないものであり、IRでの公開が大学の発信機能の向上と、多くの人々の目に触れることから、質の向上にも寄与することが期待できるとしている。更に今後の展開として、「各大学等が保有するユニークな資料や他では流通しづらい資料」と

いった、「独自性を意識した」情報の登載が重要であるとしている。次節では、このようなIRのコンテンツがどのように利用されているかについて概観する。

表1 資源タイプ別コンテンツ数

資源タイプ	コンテンツ数	%
学術雑誌論文	307,982	21.9%
学位論文	75,524	5.4%
紀要論文	593,344	42.2%
会議発表論文	85,254	6.1%
会議発表用資料	11,410	0.8%
図書	22,199	1.6%
テクニカルレポート	15,760	1.1%
研究報告書	25,272	1.8%
一般雑誌記事	55,795	4.0%
プレプリント	352	0.0%
教材	8,407	0.6%
データ・データベース	52,659	3.7%
ソフトウェア	30	0.0%
その他	152,625	10.9%
合計	1,406,613	

2.3 IRのアクセス状況

2.3.1 IR利用の特徴

ここではまず、JAIRO利用統計からIRにおける利用の特色を把握する。同利用統計は月ごとに訪問数や検索数、国別アクセス統計やアイテム毎のアクセス状況などが公開されている。上記のコンテンツ内容では紀要論文が最も多い資源であったが、アクセスにおいても紀要論文へのアクセス数がトップで、次いで学術雑誌論文となっている(図2)。

国別では日本国内からのアクセスが多いものの、欧米を中心に海外からのアクセスも見られる(注4)。これについては、日本のIRでは、英語で書かれた登録論文の利用者は主に海外からアクセスしている傾向があるとされる(佐藤, 永井, 古賀, 三隅&逸村, 2011, p. 393)。

更に、IRの利用者は固定された電子ジャーナルの利用者とは異なる層であり、Google等のサーチエンジン検索から一度だけアクセスするような利用が多いことや、大学または研究機関ドメインからのものは25%未満で、民間プロバイダドメインからのアクセスが多い傾向が報告されている(佐藤, 永井, 古賀, 三隅&逸村, 2011, pp. 397-399)。また、佐藤, 永井, 古賀, 三隅&逸村(2011, p. 400)は、これらの傾向から、機関リポジトリ利用者の多くが「専門領域の研究者以外の人々であった」としている。しかし、IRは電子ジャーナルとは異なりパスワードも必要なく、自宅からもアクセスできる面では研究者にとって利点といえる。

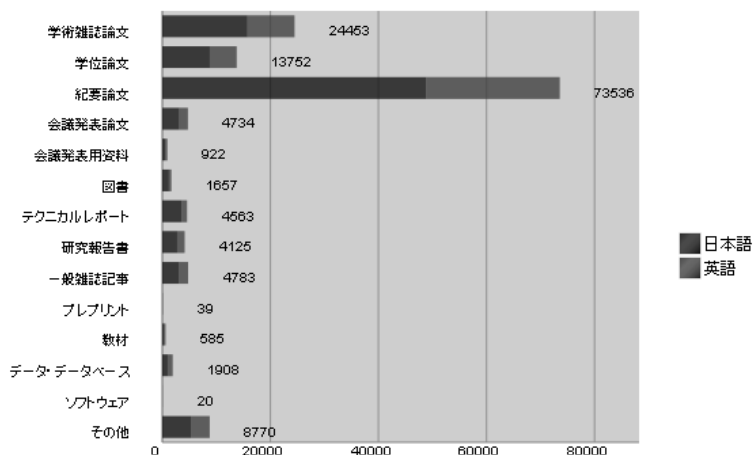


図2 2012年8月アイテムアクセス状況
(JAIRO 利用統計 2012年8月 <http://jairo.nii.ac.jp/stats/item.do>)

JAIRO 内の IR 全体のアクセス数について見ると、例えば、2012年1月から8月のアクセス状況では、JAIRO への訪問回数は月平均約 81,300 件で、アイテムの詳細表示回数の平均は約 175,000 回となっている。ここには各機関の IR に直接アクセスされた数値は含まれない。この件数については、決して少ないものではなく、佐藤、永井、古賀、三隅&逸村 (2011, p. 400) は、同一文献の電子ジャーナルと IR への登載による両者のアクセスログ等の分析から、IR 登録論文は被引用増加には繋がらないものの、「サーチエンジンを介し、電子ジャーナルに匹敵するだけの利用を得ている」としている。

なお、JAIRO 利用統計では、国内 IR の月ごとのアクセス統計が閲覧できる。アイテムアクセス統計では上位 200 位までの各文献毎のアクセス回数、ダウンロード回数を把握することができる。例えば、2012年8月の紀要論文のアクセスランキングでは、詳細表示回数 48,853 回の内、1位 246 回、2位 212 回、3-5 位が 160 回代、6-8 位が 150-140 回代、9-11 位が 100 回代であるが、60%以上が 20 回代のアクセス回数であり、最も少ないアクセス回数は 19 回となっている。学術雑誌論文では 1位の論文のアクセス数が 408 回に対し、2位は 68 回と大差がある。いずれも上位を占めるのは国立大学の IR である。上位を占める IR は、登載データ数が多く、著名な研究成果や古い資料や文献など、特色のあるコンテンツを持つ国立大学や大・中規模の私立大学が並ぶ。また、教材などのもともと登載数が少ないアイテムではアクセス回数も低くなり、1月のアクセス回数が 2ケタ代のものが 90%近くを占めている。

本章では日本における IR の意義、そのコンテンツの特性、利用状況について概観した。次章では本学 IR で公開した LL ブックの製作過程と電子書籍版への反応について述べる。

3. 写真版 LL ブック『はつ恋』電子書籍版の IR 公開

3.1 写真版 LL ブック『はつ恋』の目的

この写真版 LL ブック『はつ恋』は1章で述べたように、藤澤氏や多賀谷氏を中心に大阪芸術大学の院生や学生が制作したものである。筆者は藤澤氏と大阪芸術大学を仲介し、この企画段階から関わってきた。

LL ブックは日本ではまだ認知も低く、スウェーデンのような国の支援もない。自分で読んで理解できるように書かれた本や資料は、子ども向けのモノと捉えられがちであるが、一般成人が社会生活を送る上で得られる情報や知識を、同じように彼らに提供できるものの1つが LL ブックといえる。しかし日本では、日常生活に役立つ知識を得ることを目的とした、教育的なものがほとんどで、純粋に楽しみのための LL ブックは発行されていないのが現状である。

藤澤 (2009a, p. 13) によれば、知的障害や自閉症、学習障害のある人々は、「生活年齢と知的年齢の差が歳を重ねるとともに大きくなるため、読める本と読みたい本が一致しなく」なることで、生活の中で生じた興味や関心を埋める本や情報を得られていないという。障害のある人も様々な社会生活の中で、一般的な青年と同じように様々な興味や関心を広げる。しかし、彼らが読める興味や関心に沿った純粋な楽しみのための本がないのである。藤澤 (2012, p. 38) は「理屈なく楽しめるという読書を LL ブックで経験してほしい」。「おもしろい、楽しい、こわい、かわいそう、かなしい」というような感情がわき起こる本と出会ってほしい」と述べている。

このような現状を踏まえ、『はつ恋』の制作に当たっては、成人の人も“楽しめる”、一般の人が見てもおもしろいと感じられるような LL ブックを目指した。その際、藤澤氏所蔵のスウェーデンの写真による LL ブック『何が起こったの』(原著タイトル：“Oj, vad händer?”)を参考にした。この本はモノクロの写真だけで、オチのあるエピソードを4コマ漫画風に表現したもので、5編の独立したエピソードが含まれている。写真のクオリティ、登場するアクターの表情も洗練されており、写真集としても楽しめるような一冊である。藤澤 (2009, pp. 279-280) は、写真だけで表現することについて、普段は起こらないようなハプニングに巻き込まれたおもしろさが、生身の人間の写真で表現することで「現実起こったこととして捉えられる」のではないかとしている。

3.1.2 LL ブック『はつ恋』の特色

上述のように『はつ恋』は対象を成人とし、青年期の読者が興味を持つ恋愛をテーマとした。7つのエピソードを1話4-5枚の写真で、それぞれに面白いオチのある短編とした。また、偶然の出会いから恋心が芽生え、彼女に思いを伝えようとしては失敗を繰り返すが、7編目で恋が実するというもので、全体で一つのストーリーとなるように構成した。ストーリーを追うことは難しいかも知れないが、1つ1つのエピソードは短く必ずオチがあるので、個々のエピソードを楽しむこともできる。このエピソードやオチも学生達とのデイ

スカッションから生まれたものが多い。この案を元に絵コンテを作成し、それに基づいて撮影が行われた（注5）。

また、今回は文字を入れず、登場人物も限定しほとんどが男女2人の場面となっている。背景などにも多くのものが写り混むと、障害のある人にとっては何処に視点を置けば良いのかわからないため、人物を大きく捉え、1コマごとに同じカメラ位置に固定して撮影が行われた。

当初は紙メディアとして制作したが、LLブックでは写真には高画質の解像度が求められるため、製本時の用紙にも経費がかかること、高い印刷技術も求められることなどから、大量の発行は困難であった。まず、試作版として製本されたものを数冊制作した（注6）。

3. 1. 3 『はつ恋』の評価

藤澤氏は、試行版として制作された冊子を、実際に24人の知的障害のある方々に見ていただき、見やすさ、楽しさなどの聞き取り調査を行っている（注7）。

その結果、24名中17名が「わかりやすい」、「楽しかった」と回答し、その内7名が写真の本であることで、「わかりやすかった」「おもしろい」という感想を持ったとしている。また、「私もこのような恋がしたい」、「初恋がしたい」等の感想も5名から述べられたという。楽しかった箇所も、制作側が意図したオチの部分を楽しかったとし、「制作者がねらった笑うつばが十分理解されていたと考えられる」と述べている（藤澤, 2012, p. 39）。

実際の調査現場でも、写真だけの本なので、他の人と一緒に読むことでお互いが共感したり、違う見方をする人が居たり、コミュニケーションが活発になり楽しんで読んでいただけだという。一方で、文字がないことへの抵抗感を示す方もあった。しかし、文字がないことで想像力を働かせたり、自由にイメージを膨らませる効果もあるだろう。それが、新たな興味を呼び起こし、読むことへの関心を高めるきっかけを作るかも知れない。

3. 2 電子書籍版としての発行

こうした評価から複数の出版関係者にも意見を求めた。現在の『はつ恋』は試行版であり出版物として流通させる困難さから、電子版の制作が妥当と判断された。まずこの試行版が多くの人々の目に触れるためには、電子書籍としての流通をどう確保するかを検討した結果、IRでの公開を選択することになった。その際、上述のように小松准教授のご協力でも電子書籍版データファイルが制作された。このファイルは110029KBのPDFファイル形式で、閲覧の推奨環境はiPadのi文庫HD、PCのOSはwindows7である。

3. 2. 1 読むことに障害のある人のための図書の出版流通

LLブックの電子書籍化の事例は紙メディアが主流であり、電子書籍化については未知数の要素が強かった。知的障害や学習障害のある人たちの読書支援としては、マルチメディアDAISY（注8）と呼ばれるデジタル録音図書がある。CDによる音声録音図書でパソコン上で本文の文字列や画像が表示され、読み上げている部分が反転表示できたり、文字の

フォントやサイズ、読む速度の調整などが行える機能を持っている。また、コンピュータを用いることで文中の文字列から読みたいところを検索するなど容易になっている。しかし、DAISYは音訳によるため、活字から視覚情報を読み取り、音声で正確に分かりやすく伝える難しさがある。更に図表や写真などの視覚情報も音訳するためには相当の時間を要することが課題とされている(萩野, 2011, p. 28)。

3. 2. 2 読みやすい図書のためのガイドライン

印刷された活字を読むことに障害を持つ人は、視覚障害や自閉症、発達障害、知的障害や学習障害の人々、そして異なる母語で育った人々などである。それぞれの人々は障害の重さも異なり、複数の障害を抱えている人も多い。そのため、完全なガイドラインやマニュアルは存在しないと言える。しかし、IFLA(国際図書館連盟)では、1997年に「読みやすい図書のためのIFLA指針」が発表され、2011年に改訂版が出された。これは、あらゆる人に読書の楽しみや情報を得る権利を保障するためには、読みやすい図書や雑誌、新聞などさまざまなニーズに応える必要があるとし、読みやすく、分かりやすいための図書の基本的なガイドラインとなっている。ここでは、電子媒体について、音声、動画などは読むことの支援に大いに役立つとしている。更に、CDやDVD、MP3などの電子情報フォーマットは、操作性や機能が障害のレベルなどに対応でき、操作のヘルプ機能の充実などができれば、非常に有効であるとしている(国際図書館連盟, 2012, pp. 28-29)。

これらは、電子書籍にもあてはまると思われるが、電子書籍については、「従来の印刷された書籍に匹敵する」とされており、パソコンや電子書籍リーダー、携帯電話でも読むことができると説明している(国際図書館連盟, 2012, p. 40)。また、萩野(2011, pp. 29-30)は、電子書籍にはもともとコンピュータが読み上げ可能なテキストデータが埋め込まれていることから、コンピュータがテキストデータを自動で音声で読み上げる「スクリーンリーダー」と呼ばれる機能に近い形で、電子書籍を音訳することが可能であるとしている。そのため、従来の録音図書に比べ新しい電子書籍を早く提供できるという。

今回の『はつ恋』でも、マンガの吹き出しのように説明が読めたり、音や声を入れることもできるだろうと思われた。更に、今回はモノクロでの出版だがもともとはカラーで撮影されたものであり、個人個人が見やすい明るさや色に変えたりする機能を付けることもできるのではないだろうか。また、高解像度の写真は見たい部分をタップして拡大しても精細であり、電子化したことで固定された場面のサイズを変えたり、見たいところを詳しく見られる楽しさもあることが分かった。電子書籍は複雑な操作も必要なく、LLブックなどの分野にも様々な可能性を見せてくれるものである。

3. 3 電子書籍版のIR公開の広報とアクセスの増加

上記のようにLLブックの電子書籍化によって、予想以上の成果や今後への期待を高めることができた。これをより広く多くの方に見ていただく上で、オープンアクセスであるIRでの公開は最も良い選択であったかも知れない。しかし、LLブックの認知だけでなくIR

の認知もまだ十分でない状況を踏まえ、2012年7月21日の公開後、広報を積極的に行うことになった。

3.3.1 広報手段及び広報先

広報手段としては藤澤氏及び筆者が参加するメーリングリスト（以下 ML）への投稿、講演先での口頭による広報、藤澤氏の『学校図書館』9月号への原稿掲載等である（表2 主な広報参照）。多賀谷氏は8月5日、22日、9月6日、14日の講演時に『はつ恋』の紹介を行なった。MLは主に図書館関係の研究会で、大学図書館関係者が参加する「大学図書館問題研究会」のML及び多文化サービスの支援者、公共図書館員など様々な人が所属している「むすびめの会」のMLに投稿した。また8月22日のFLFのMLは主として大学図書館員による勉強会で約60名が参加している。これらのMLへの参加人数は約430人である。その他に30人程度の日本図書館研究会研究委員会（主として図書館情報学研究者が所属）に投稿した。藤澤氏は大阪情報教育研究会と出版UD研究会のMLへ投稿している。MLでの広報では、LLブックの趣旨の説明と『はつ恋』のメタデータへ直接アクセスできるURL（注9）を案内した。

表2 『はつ恋』の日別アクセス数抜粋 2012年7/1～9/17

月日	アクセス数		ダウンロード数		
	合計	学内	合計	学内	
8月 2日	20	1	6	1	主な広報
8月 8日	24	2	17	1	8月 5日 大学図書館問題研究会全国研修会 講演
8月 17日	20	0	19	0	8月 8日 むすびめの会及び日図研研究委委員会 ML
8月 20日	26	0	16	0	8月 17日 大学図書館問題研究会 ML
8月 22日	35	1	13	0	8月 22日 京都図書館大会講演及びFLFのML
8月 23日	73	1	59	0	9月 1日 雑誌『学校図書館』9月号藤澤氏記事掲載
8月 24日	21	0	13	0	9月 6日 私立短大図書館協議会全国研修会 講演
8月 28日	23	0	7	0	9月 14日 私大図協西地区部会研究大会 講演
9月 6日	10	0	8	0	9月 17日 大阪情報教育研究会と出版UD研究会のML
9月 17日	45	0	19	0	

3.3.2 本学 IR におけるアクセス数の変化

表2はリポジトリ公開の2012年7月21日から9月17日までで、アクセス数が2ケタを超えた日を抜粋したものである。7月中のアクセスはリポジトリ掲載のメタデータの作成と確認、更新などで図書館職員など関係者のアクセスであるため省略したが、上記期間の平均アクセス数は8.1回、平均ダウンロード数は4.8回であった。広報を開始したのは8月5日からであるが、何らかの広報をした日から近いところで2ケタのアクセスになっていると言える。通常はLLブックをテーマに研究している人や関心のある人しかIRを検索することは考えにくく、多面的な広報がアクセスを増やした結果である。

なお、本学 IR 内のコンテンツのアクセス統計では、上記 URL からの直接のアクセスや、本学 IR の検索、JAIRO からのアクセスも含まれたアクセス回数やダウンロード回数の上位アイテムが確認できる。そこでは『はつ恋』の7月のアクセス回数は75回（内学内42）、8月は309回（内学内4回）、9月は29日現在150回（内学内7回）でいずれもトップのアクセス回数となった。更に、ダウンロード数の合計は7月49回（内学内18回）で6位、8月202回（内学内2回）1位、9月は66回（内学内0）で3位となった。アクセスに対し、ダウンロード回数が少ないのは、ファイルを見るための推奨環境が合わないこと等が考えられた。次章では、大学広報としての IR の機能について述べ、全国の IR の中における本学 IR へのアクセス状況について、JAIRO 利用統計から把握する。

4. 大学広報としての IR

4.1 大阪女学院の IR の特性

本学の IR は“Osaka Jogakuin Research Repository”として、2010年の3カ年、NIIの委託事業補助を受けて図書館での構築が行われている。本学 IR では以下のようなコミュニティが設定され、それぞれが関係する図書や論文、教材、報告書などが公開されている。

- 01 大学（国際・英語学部）
- 02 大学院（21世紀国際共生研究科平和・人権システム専攻）
- 03 研究所（大阪女学院国際共生研究所）
- 04 短期大学（英語科）
- 05 生涯学習
- 06 図書館
- 07 学院資料

IRDBのコンテンツ分析によると、2012年9月現在の本学 IR のコンテンツ数は1,863件となっている。資源別では表3に示すように、「その他」が最も多く、それ以外では紀要論文、図書、教材、学術雑誌論文の順となっている。紀要論文が多いことは表1の全国の IR 統計と変わらないものの、全体としてのアイテム登録数が少ない、図書や教材が2ケタを超える割合であることは本学 IR の1つの特徴といえる。

表 3 OJC 資源タイプ別コンテンツ数

資源タイプ	コンテンツ数	%
学術雑誌論文	205	11.0%
学位論文	0	0.0%
紀要論文	420	22.5%
会議発表論文	0	0.0%
会議発表用資料	57	3.1%
図書	301	16.2%
テクニカルレポート	0	0.0%
研究報告書	5	0.3%
一般雑誌記事	111	6.0%
プレプリント	0	0.0%
教材	275	14.8%
データ・データベース	0	0.0%
ソフトウェア	0	0.0%
その他	489	28.2%
合計	1,863	

4. 2 JAIRO 利用統計におけるアイテムアクセス状況

ここでは、日本の IR の統合検索システムである JAIRO の利用統計から、本学 IR のアクセス状況を把握する。JAIRO 利用統計は JAIRO に訪れて JAIRO 内を検索したものやサーチエンジンから JAIRO 内のアイテムにアクセスされた回数であり、3 章で見た学内 IR に直接アクセスしたものは含まれない。同利用統計では毎月毎にアイテム別の利用統計が出されておりアクセス数の多い順に 200 件までのアイテムが閲覧できるようになっているため、他大学との比較から本学 IR 内コンテンツへのアクセス状況が確認できる。

4. 2. 1 雑誌記事のアクセス状況

まず、本学 IR のコンテンツ数が多い資源である紀要論文、一般雑誌記事、図書、教材、学術雑誌論文について、2012 年 4 月から 9 月のアイテムアクセス状況を見てみた。学術雑誌論文については 4 月に『核兵器の廃絶と通常兵器の軍縮』（黒澤満著）が 2 回のアクセス数で 161 番目に、6 月に「中国の児童労働」（香川孝三著、『子どもの安全保障の国際学的研究』掲載）がアクセス回数 30 回で 186 番目に位置していた。なお、4 月から 9 月の紀要論文及び一般雑誌記事については 200 位以内にランクされたものはなかった。

4. 2. 2 図書のアクセス状況

しかし、本学 IR の特色でもある図書や教材では国立大や大規模大学が大半を占める中に、複数のコンテンツが毎月継続してアクセスされていた。まず、図書部門の 2012 年 4 月から 9 月のアクセス回数の月平均は 2,088 回であった。本学の図書のコンテンツでは、『田辺伝道の進展：〔一八八五年（明 18）〕』（ヘール, J. B. 著）が 4 月（56 回）・5 月（61 回）

で8位にランクされ、6月には56回で6位に、7月から9月にかけてもアクセス数は6～15回と低下するものの、7月20位、8月57位、9月は41番目に位置していた。

また、『えのき茂る丘で：創立100周年記念寄せ書き集』や『東雲の丘の学校：知ってください大阪女学院』所収の「私と母校大阪女学院」は、4月から9月まで30位以内に継続してランクインしている。同書所収の「生徒たちが作った制服です」は4月にアクセス回数3で86位に、Morton, J. H.『祝福された手：宣教師ミセス・ドレナンの生涯』は5月にアクセス回数7回で43位に、夫明美著『タイ人日本語学習者による『けど』の習得について』が120番目でアクセス回数3回にそれぞれ位置していた。更に、8月にはMcCarty, S. 著の8編が各2回のアクセスで136番目から143番目の範囲に並んでいる。

LLブック『はつ恋』はこの図書の部門で、8月のアクセス回数が38回でアクセスランキングは2位となった。9月は29日現在で6位19回のアクセス数であった。なお、『はつ恋』は8月には38回のアクセス回数ながら全アイテムの中でもアクセスランキングで69位に位置した。まだ認知の低いLLブックが200位以内にランクされたことは前章で述べた広報の効果と言える。なお、図3に見るように1位や3位以下はすべて国立大学であり、特色のあるコンテンツは小さな大学であっても全国規模で同列に並ぶ力を持つといえる。

詳細表示回数(日)	詳細表示回数(英)	詳細表示回数(合計)
1,207	450	1,657
1	 広島大学原爆死没者慰霊行事委員会 原爆と広島大学：生死の火 学術集(復刻版)	 広島大学学術情報リポジトリ 広島大学 91
2	 藤澤, 和子, 川崎, 千加, 多賀谷, 津也子, 清水, 絵里香 LL写真ブック「はつ恋」(電子書籍版) 2012-03-20	 大阪女学院 学術情報リポジトリ 大阪女学院大学 38
3	 梅野, 健, UMEMO, Ken 対談 自然現象と計算論との整合性 新分野開拓誌, pp91 - 100, 2004-06	 総研大リポジトリ 総合研究大学院大学 30
4	 久間, 義文, Kyuma, Yoshifumi, キュウマ, ヨシフミ 『海辺のカフカ』ひとつの書式と偶然の系列 2012-03	 九州大学学術情報リポジトリ 九州大学 26
5	 京都大学百年史編集委員会 【部局史編1】口絵写真 京都大学百年史：部局史編；1, 1997-09-30	 京都大学学術情報リポジトリ 京都大学 24

図3 2012年8月アイテムアクセス状況(図書)
(JAIRO 利用統計 <http://jairo.nii.ac.jp/stats/item.do>)

4. 2. 3 教材へのアクセス状況

ここでは本学のもう一つの特色である教材へのアクセスについて見てみたい。教材はJAIRO全体でのアイテム数の中で占める割合も全体の0.6%と少なく、4月から9月の月別の平均アクセス回数は1,049回であった。しかし、アクセス回数は少ないものの、本学教材の「5-1「情報の理解と活用」二次資料」(制作：小松泰信)、「3-5「研究調査法」Project 5」(制作：丸本郁子)の2点は6月を除く毎月1-2回のアクセスがあった。また「4-3「自己形成スキル」テキスト 2011年度春学期 プロジェクター版「思いやり」」(制作：手嶋英貴)も4月にアクセス数は1回であるがアクセス上位200の中に入っていた。これらはいずれも

情報リテラシー科目であるが、本学の教育の特性が一定の社会的認知を得ていることを示している。

4. 3 IR の広報的機能

IR の広報的価値を述べたものはいくつか散見できる。IR は一般的にはあまり知られていないものであるが、朝日新聞社が毎年発行している『大学ランキング』では平成 22 年度版から教育ランキングの中に「機関リポジトリ」の項目が新設された。このことは IR が社会的に認知されてきたことを示すものである（国立情報学, 2011, pp. 2-3）。また、国立情報学（2011, p. 3）はこうした大手のメディアで取り上げられることで IR の認知が高まれば、大学の研究成果を「見える化」でき、大学の情報発信としての位置づけが可能であるとしている。

前田（2011, p. 4）は、著作の公開という面で出版するよりは低コストで、大学としての公式のサービスという信頼性が確保できることは IR の長所の一つとし、IR を自機関の研究・教育活動をアピールし「存在を主張する広報ツール」として捉えている。その上で、IR を出版社主導で価格高騰が続く学術コミュニケーションとは別の、学術情報流通のプラットフォームとしての役割を担うものとして位置づけている（前田, 2011, p. 6）。

では IR の大学広報としての役割を高めるためには何が必要なのか。筑木（2009, p. 1）は京都大学学術情報リポジトリの構築の経験から、コンテンツ数とアクセス件数はある程度比例するとし、コンテンツ数が少なければ検索でヒットせず、コンテンツ数の増加の重要性を指摘している。更に、IR を「行き止まりにしないための工夫」（筑木, 2009, p. 4）として、CiNii と IR との連携をはじめ、Scopus（注 10）、Google Scholar、国立国会図書館のデジタルアーカイブポータルとの連携など、様々なアクセスのための入り口を設けたとしている。これは IR へのアクセスの 8 割以上が「検索エンジンからフルテキストのキーワードを通じて論文本文」に辿り着くことを意識した「メタデータの「種まき」」（筑木, 2009, p. 4）である。

また、京都大学のヒト iPS 細胞論文を IR で公開したことが多くの関心を引き寄せ、2 週間も掛からずアクセス数が 1000 件を超えるものとなり、多くのメディアでも取り上げられたことを報告している（筑木, 2009, pp. 5-6）。他にも学内出版会や大学広報課との緊密な連携などで、「大学の重点領域を社会にアピールする」（筑木, 2009, p. 6）サポートとして IR が機能するのではないかとしている。いずれの大学にも社会的な関心を集める研究や教育がある。IR は低コストでそれら電子化されていない貴重な資源を電子化し、オープンにすることができる情報発信力になるものとして捉えられている。

5. まとめ

本稿では、日本における IR の意義や現状について概要を把握した上で、本学 IR で公開した LL ブック『はつ恋』（電子書籍版）のアクセス数の変化から、外部へのアピールがそのアクセス数に影響を与えることを述べた。更に、LL ブックといった社会的マイノリティ

への支援としての電子書籍の可能性も示唆された。

本学の IR コンテンツでは図書や教材が比較的多く公開されているが、それらは本学の教育・研究の特色を示すものであり、JAIRO 利用統計でも複数の本学発のコンテンツが 200 位以内にランクされていた。また、LLブック『はつ恋』は全アイテムでのアクセスランキングでもランクインし、多面的な広報がアクセスを増やし、引いては大学 IR の知名度を高める上で重要であることがわかった。特色のあるコンテンツは IR へのアクセスを増加させ、それが小さな大学であっても、国公立大学や大規模大学と同列に大学の個性を打ち出せる力を持つものである。これは IR が各大学が蓄積してきた研究・教育の成果を広く社会にアピールする機能を持つことを示唆するものといえる。

しかし、JAIRO 内だけのランキングではそのコンテンツの広報として有効ではあっても、大学広報としては十分とは言えない。先述したように、IR へのアクセスは多くがサーチエンジンからであるとすれば、特色のあるコンテンツの登載とコンテンツそのものの多面的な広報により、サーチエンジン検索で大学名がトップページに上る確率が高まることになる。LLブック『はつ恋』の場合、Google で“LLブックはつ恋”をキーワードに検索すると、トップに本学 IR、JAIRO の当アイテムの概要ページ、はてなブックマークや個人の twitter で紹介されたものが表示される (図 4)。また“LLブック写真”、“LLブック電子書

DSpace at My University: LLブック写真版「はつ恋」(電子書籍版)
ir-lib.wilmina.ac.jp > ... > LL写真ブック「はつ恋」- キャッシュ
藤澤和子 著 - 2012
タイトル: LLブック写真版「はつ恋」(電子書籍版). 著者: 藤澤, 和子川崎, 千加多賀谷, 津也子清水, 絵里香. 著者別言語: 企画・監修: 藤澤和子 多賀谷津也子 田中晋弥企画・協力: 川崎千加 清水絵里香写真: 上田悠暉 三田周 河嶋恭平. キーワード: 電子書籍LL ...

JAIRO | LLブック写真版「はつ恋」(電子書籍版)
jairo.nii.ac.jp/0160/00001949 - キャッシュ
この電子データ「はつ恋」は、日本発の写真版LLブック(LLはスウェーデン語のLättlästの略語。「やすく読める」本)の試行版である。LLブックは知的障害や読書障害(ディスレクシア)の人にもわかりやすく読める本として制作されたものである。スウェーデンでは国 ...

はてなブックマーク - JAIRO | LL写真ブック「はつ恋」(電子書籍版)
b.hatena.ne.jp > コンピュータ・IT - キャッシュ
2012年8月23日 - はてなブックマーク > コンピュータ・IT > JAIRO | LL写真ブック「はつ恋」
(電子書籍版) ... LLブックについてはこちら
(http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/library/0903_tomonken/matsui.html) #京都図書館大会 2012/08/23 Twitterで ...

Twitter / libyo: 大阪女学院図書館の機関リポジトリにおいて、LLブック ...
https://twitter.com/libyo/status/238273476555833344 - キャッシュ

図 4 “LLブックはつ恋”での Google 検索結果トップページ

(2012年9月30日現在)

籍”でも本学 IR がトップページの上位に入る。

つまり、IR コンテンツが広く知られることで、大学名がサーチエンジン検索でトップに入り、多くの人々の目に触れる機会を増やすことにつながる。Google 検索でトップページに来なければ、その企業は存在しないとまで言われるが、IR は大学の広報における Web 広報の一翼を担うものとして捉えることができる。IR を大学の Web 広報に活用する意味では、IR に対する学内の広報的意義への認知を高め、個性あるコンテンツの公開を推進する必要がある。IR による大学広報は大学の個性を打ち出すものであり、大学広報とも相互に連携した学外への広報、そのための図書館側からの情報提供やアピールも求められよう。

謝辞 LL ブック公開に際し理解を示していただいた藤澤和子氏、多賀谷津也子氏、電子書籍化にご協力いただいた小松泰信准教授、IR 登録から統計データの提供などにご協力頂いた図書館のみなさまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

注

1. スウェーデンでは 1960 年代から知的障害の人たちの読書を支援する政策がとられ、その中の 1 つとして「やさしく読める図書センター」が設立されている。こうした国の支援による LL ブックは年間 30 冊程度刊行されているという。LL ブックが対象としている読者は青年、成人に達しながら読むことに障害のある人々であり、その生活年齢に見合った内容がわかりやすく書かれている本である（藤澤，2009a, pp.7-8）。
2. 京都府立南山城支援学校勤務。言語聴覚士、臨床発達心理士。同志社大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程修了。教育学博士。日本版 PIC などの AAC（補助代替コミュニケーション）の開発研究を続けている。著書に『LL ブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』（読書工房，2009）などがある。
3. 多賀谷津也子氏は大阪芸術大学図書館課長。著書に『図書館を演出する：今、求められるアイデアと実践』（人と情報を結ぶ WE プロデュース，2010）がある。同大学図書館では学生や院生による「LIBRARY DESIGN LAB.（大阪芸術大学図書館サークル）」を結成している。今回の LL ブック製作では企画段階から写真撮影、編集から印刷・製本まで約 2 年を掛けてこのラボに関わる多くの院生・学生の協力を得た。
4. JAIRO の利用統計、国別アクセス状況
<http://jairo.nii.ac.jp/stats/#domain> から確認できる。
5. 絵コンテやデザイン・装幀などは大阪芸術大学デザイン学科の田中晋弥さん、写真撮影は同大学写真学科の上田悠暉さん他 2 名、アクターとなってくれたのは同大学舞台芸術学科の末川一樹さんと芸術計画学科の佐々木麻帆さん等（二人は現在はプロの俳優として活躍）である。
6. 試行版は印刷から製本まで手作りで、多賀谷氏をはじめとする「LIBRARY DESIGN LAB.」の学生達によるものである。なお、日本発の LL ブックであり、今後継続した発行を目指して同大学大学院修了生の近澤優衣氏による LL ブックのロゴを作成した。
7. 調査結果は、日本コミュニケーション障害学会第 38 回学術講演会（2012 年 5 月 13 日 於 県立広島大学）で、「知的障害や自閉症のひとのためのやさしく読める本：LL ブックの制作に関する研究」として発表された。また、『学校図書館』2012 年 9 月号では「役に立つ、楽しめる LL ブック

クを」として報告された。

8. Digital Accessible Information SYstem の略。「アクセシブルな情報システム」と訳される。視覚障害者や普通の印刷物を読むことが困難な人々のためにデジタル録音図書の国際標準規格として、50 개국以上の会員団体が構成するデイジーコンソーシアムにより開発と維持が行なわれている情報システムである（日本障害者，2011）。しかし、まだ発行部数は少なく、サービスとして提供している公共図書館も多くない。
9. 詳細は本学機関リポジトリ「写真版 LL ブック「はつ恋」（電子書籍版）」の抄録 URL <http://ir-lib.wilmina.ac.jp/dspace/handle/10775/2421>
10. エルゼビア社が提供する世界最大級の抄録・引用文献のデータベース。

引用文献

- 藤澤和子. (2009a). 知的障害や自閉症のひとたちの読書をひらく. In 藤澤和子&服部敦司 (Ed.). 『LL ブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』. (pp. 6-18). 東京：読書工房.
- 藤澤和子. (2009b). 写真・絵・シンボルによるわかりやすい情報提示. In 藤澤和子&服部敦司 (Ed.). 『LL ブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』. (pp. 276-294). 東京：読書工房
- 藤澤和子. (2012, 9). 役に立つ、楽しめる LL ブックを. 『学校図書館』, (743), 37-39.
- 萩野正昭. (2011, 3. 13). 2. 4 視覚障害者の読書と電子書籍の可能性. 『図書館研究リポート』, (11), 28-30. Retrieved 26 September, 2012, from http://current.ndl.go.jp/files/report/no11/lis_rr_11_rev_20090313_2.4.pdf
- JAIRO. (2012, 8). 2012 年 8 月利用統計. 国立情報学研究所. Retrieved 26 September, 2012, from <http://jairo.nii.ac.jp/stats/item.do>
- 科学技術・学術審議会. (2009, 7). 2. 学術情報発信・流通の推進. In 『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）』. Retrieved 23 September, 2012, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1283003.htm
- 科学技術・学術審議会. (2012, 7). 4. 機関リポジトリの活用による情報発信機能の強化について. In 『学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について』. 文部科学省. Retrieved 23 September, 2012, from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/02/1323890_1_1.pdf
- 国立情報学研究所. (n. d.). 趣旨. 事業について. 学術機関リポジトリ構築連携支援事業. 国立情報学研究所. Retrieved 21 September, 2012, from <http://www.nii.ac.jp/irp/about/>
- 国立情報学研究所. (2011, 11). 『変容する学術情報流通、進展する機関リポジトリ. 学術機関リポジトリ構築連携支援事業第 2 期報告』. 国立情報学研究所. Retrieved 21 September, 2012, from http://www.nii.ac.jp/irp/archive/report/pdf/csi_ir_h20-21_report.pdf
- 国立情報学研究所. (2012a). 機関リポジトリ一覧. 学術機関リポジトリ構築連携支援事業. 国立情報学研究所. Retrieved 22 September, 2012, from <http://www.nii.ac.jp/irp/list/>
- 国立情報学研究所. (2012b). IRDB コンテンツ分析. 国立情報学研究所. Retrieved 23 September, 2012, <http://irdb.nii.ac.jp/analysis/index.php>
- 国際図書館連盟特別なニーズのある人々に対する図書館サービス分科会 野村美佐子, スカット, G. & トロンバック, N. B. (Ed.). (2012). 『読みやすい図書のための IFLA 指針（ガイドライン）』 改

- 訂版. IFLA 専門報告書第 120 号. 日本障害者リハビリテーション協会訳. 東京: 日本図書館協会.
Retrieved 29 September, 2012, from
<http://www.ifla.org/files/assets/hq/publications/professional-report/120-ja.pdf>
- 前田信治. (2011, 10. 1). 機関リポジトリで何をしたいのか. 『日赤図書館雑誌』, 18 (1), 3-7.
- 文部科学省. (2011, 8. 19). 『第 4 期科学技術基本計画』. 平成 23 年 8 月 19 日) 科学技術・学術.
Retrieved 22 September, 2012, from
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/_icsFiles/fieldfile/2011/08/19/1293746_02.pdf
- 日本障害者リハビリテーション協会. (2011). DAISY とは. ENJOY DAISY. Retrieved 26 September, 2012, from
<http://www.dinf.ne.jp/doc/daisy/about/index.html>
- 佐藤翔, 永井裕子, 古賀崇, 三隅健一&逸村裕. (2011, 9. 27). 機関リポジトリへの登録が論文の被引用数と電子ジャーナルアクセス数に与える影響. 『情報知識学会誌』, 21 (3), 383-402.
- トロンバッケ, B.I. (2009). やさしく読めることの意義とスウェーデンの LL ブック出版. In 藤澤和子 & 服部敦司 (Ed.). 『LL ブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』.
(pp. 20-49). 東京：読書工房.
- 筑木一郎. (2009, 3). 図書館は出版社になる：電子ジャーナル出版支援および大学広報としての京都大学学術情報リポジトリ事業. 『大学図書館研究』, 85, 63-73.

